

『保護者の不信感あれこれ』

1、親の目線と教師の目線 ～子どもの評価が曖昧～

親が見る子どもの実態と先生が捉える子どもの実態に、大きなギャップが生じることがある。子どもの中には「親に見せる顔」と、「先生に見せる顔」を巧に使い分ける子どもがいるからである。

例えば、Aさんは末っ子。甘えん坊でわがままな子なのに、学校では他の子に親切で責任感の強い子であるとの評価（通知表・参観日の面談）を受けていた。親としては信じられない評価だと思っていた。ところがである。中学校に入学後は小学校とは全然違う散々な評価を受け、小学校の通知表・評価（成績・行動の記録）が信じられなくなったという。

このようなことが度重なると、担任をはじめ全ての先生方の指導力・洞察力、使命感や情熱までも打ち消されてしまい、不信感に発展することになる。

親も先生も子どもの一面しか見ていないことから起こるギャップと言えればそれまでだが、いずれにしても的確な評価（？）と言えないことは事実だ。親が我が子について悪く書かれていないから「まあ、いっか！」程度に思い、親は教師の子どもを見る目・評価を信用していないとしたら…、トンデモナイことだ。

学校と家庭の「かけ橋」となるべき通知表に垣間見る典型的な「行き違い」であるが、日頃から子どもの実態をもとに目指す子ども像について具体的に話し合うなど、教師と父母の間にきめ細かな情報の交流が行われたなら、こんなことにならないはずである。

2、不信感を持たれる教師の典型 ～気配り・目配り不足～

現場の先生方にとって「個に応じた指導」「子どもを中心に置いた指導」「子どもの側に立った指導」等など耳にタコができるほど聞きなれているはずであるが…。

○子どもの病欠欠席時、家庭から欠席の連絡があったとはいえ、放課後に電話の一本をかけるなり、帰宅途中に家庭訪問するぐらいの意識が持てない教師がいる

○参観日があるからとはいえ、春先の家庭訪問一回のみで親とのコンタクトを取らない教師がいる

○自分の指導方針や学級経営理念等について、保護者理解を得ていないものだから、一学期が過ぎた頃、保護者から不協和音が出てしまう教師がいる

○“子どもの目線を大切に”とは口にするが、常に自分のいうことが正しいのであって、その路線から「はみ出た子」には辛く当たったり、厳しく叱ったりする教師がいる

○“できの悪い子”がいると、その子への指導をわずらわしく思ったり、時には理解できずにいる

と知りつつ、次への題材に平気で進もうとする教師がいる

3、アトピー性皮膚炎に悩む子

あるアトピー患者の話である。あまりの痒さに気も狂わんばかりというとき、タイミングよくダンプカーが走ってきたら…、思わず身を投げ出したくなったという。

こういう人が特別なのではなく、マンションの屋上に駆け込んだ人、列車がホームに入ってきたとき、思わず飛び込みたくなる衝動をやっとの思いで堪えた人、結婚できないことを悲観して自殺した女性等等、悩みを抱える人は少なくない。

少し前になるが中学3年の男子生徒がマンションから身を投げて自殺するという、痛ましい事が起こった。附属の名門中学に在籍しており、高校への高いハードルを悲観しての自殺か、いじめにあっていたのか等々、新聞はいろいろなことを書き立てていたが遺書がないので不明。しかし、彼が重症のアトピー患者であったことを医師は証言している。

いずれにしても、均質を求め、異質を排除する私達の国民性から考えて、アトピー性皮膚炎患者であった生徒が自殺に至るまでの苦悩を理解できずにいたことは否めない。

私の息子もアトピー性皮膚炎患者の一人。痒くて痒くて夜寝付けない。夜眠れないから昼ボーっとしてしまう。昼間も痒い。勉強どころでなかったのかもしれない。息子が言った一言が忘れられない。「この痒さは人に言っても分かってもらえない」と。

息子は重症のアトピー皮膚炎の治療を続けている。そして、その頃受けた心の傷と今も闘っている。

果たして担任はアトピーに悩む子どもの心、何かで死にたいと思うほど深刻に悩む子どもの心を理解しようとしているだろうか。私自身の反省でもある。